

■今日の課題■

学会活動と情報技術

参与 中川 靖夫

Yasuo Nakagawa

情報化推進委員会委員長、埼玉大学名誉教授



人類の文明の歴史は大まかにみて、創造（もの造り）とその伝達・拡散の歴史であると言ってもよいであろう。始めは極めてローカルな事象であったことが、伝達されて広い地域に拡散して、グローバルな社会現象にまでなることは歴史的にしばしば見られることであるが、その伝達・拡散の速度が急速に増大したのはおそらくグーテンベルクによる印刷術の発明以後であり、19世紀の電気通信技術発明がそれに一層の拍車をかけて今日に到っていると言えよう。しかしながら、これまでの伝達手段では、短時間に広い地域の多数の人々に情報の伝達をするためには、かなりの人的・財政的コストが必要であって、その負担に耐えられるのは比較的少数の発信者に限られていた。

ここ数年のうちに目を見張るばかりに普及した、携帯電話、インターネットによるパソコン通信などのいわゆるIT（情報技術）は、このような従来型の情報伝達の方式を一変しつつあり、今やマイナーな個人情報をほとんど一瞬のうちに驚くほど広い範囲に伝達することも可能となった。また、これまで大きな組織体（諸官庁、メーカーなど）から言わば一方的に情報（通達）を与えられるだけであった情報弱者（末端利用者、個人）が、発信者に対して対等の立場で情報を返して、自らの主張を公開して開陳できるようになった（情報伝達の双方向化）。

学会活動も当然のことながらこのような時代の流れとは無縁であり得ず、これら情報化の流れのなかで、学会としての在るべき姿を模索しつつあるのが現状である。会員に対してどのように学会の情報を提供し、また、会員からの意見・情報を学会の活動・運営に反映させるかを情報技術との関連において検討を重ねている。

これまで、学会の情報を会員に伝達する有力な（ほとんど唯一の）手段は学会誌であり、主として会告の記事がそれを担ってきたが、最近ではインターネットの学会ホームページがそれに代わりつつある。実際、ここ数カ月での学会ホームページへのアクセス件数は1日平均100件以上にも達している。これは照明学会の会員数（約6000名）から考えて驚異的といえるであろう。仮にこのアクセスが電話での問い合わせとして学会事務局へ掛かってきたとすると、5分に1回になり、そのようなことは全く考えられないことである。

このことは、学会のホームページが社会に対しての開かれた窓として極めて重要な役割をはたさなければならないことを教えている。そのためには、まず、ホームページの内容を充実させるのは勿論であるが、アクセスした人に対して、まず、ページを開いて先に進もうとする気持ちを起こさせるようなページのデザインが重要である。また、内容を時宜に適して更新するメンテナンス作業が的確になされなければならない。このような状況を認識して、対応するために、平成13年度から「ホームページ編集準備委員会」（委員長 池田紘一東京理科大学教授）を発足させることになり、デザインも含めたホームページの基本的な在りかたについて検討が重ねられるこことになっている。

情報化の流れはホームページの問題にとどまらず、学会活動のさらに広い範囲に及ぶと考えられ、それを、会員に対するサービス、利便さをさらに増大できる方向にして行かなくてはならないが、それとともに重大な課題も発生している。

先に述べた、情報伝達の双方向化はユーザーにとって非常に有効なことではあるが、同時に、いわば両刃の剣的な効果をもたらすものもある。すでに数々の事例が起こっているように、情報技術によって情報の改竄、破壊、中傷などによって、プライバシーの侵害、個人財産の略取、虚偽の情報とその操作による社会、市場の混乱などを比較的簡単に引き起こすことが可能になってきている。つまり、情報伝達のシステムは伝統的に人間の善意にもとづくことを前提として組み立てられて来ていて、今までではそれであまり支障は生じなかった。勿論、例外的なことはあり、例えば、ヒトラーのナチスは当時の情報技術を最大限に駆使して社会制覇を行ったことはよく知られているが、そのためには膨大な人的・財政的な支出が必要であった。しかし、今ではこの事情は一変して、悪意があれば、コストをかけずに、しかも発信者の正体が不明のままで、広い範囲に混乱や災害をもたらすことさえ可能になってきている。このような事態に対応するためには個人のモラルに対する自覚意識の徹底をはかるとともに、何らかの物理力としてのセキュリティ（ハード、ソフト面でのガード）を常に怠らないようしなければならない。